中學國文教科書 修正十版 卷四

375.9
Y019
資料室

41804
教科書文庫
4
810
41-1915
20000
40726

修正十版
文部省檢定濟
大正四年一月九日　中學校國語科教科書

吉田彌平編

# 中學國文教科書

卷四

東京　光風館藏版

資料室
375.9
Y019

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 40726 圖書

中學國文教科書 卷四

# 目次


一 樂地……幸田露伴 一頁
二 富士雪を帶ぶ……德富蘆花 五
三 關の秋風…… 七
四 自恃……坪內逍遙 九
五 海軍戰死者ヲ祭ル……東鄉平八郎 一四
六 八道の山（新體詩）……大町桂月 一六
七 赤間關……遲塚麗水 二〇
八 川中島（琵琶歌）…… 二五

九　人の問に答ふ……尾崎行雄　三〇
一〇　利根の秋曉（口語文）……德富蘆花　三四
一一　秋の夜……幸田露伴　三八
一二　わが幼時……新井白石　四一
一三　讀書……坪內逍遙　四七
一四　武藏野（口語文）……國木田獨步　五二
一五　鴻門の會……大町桂月　五七
一六　北京の四時（口語文）……宇野哲人　六四
一七　元祿の地震……新井白石　六九
一八　八束穗（短歌）……　七三
一九　歲の暮……三宅雪嶺　七五





二〇　寒稽古……　七八
二一　寺內大將に贈る（書牘文）……乃木希典　八二
二二　乃木將軍（新體詩）……森鷗外　八五
二三　簡易生活（口語文）……芳賀矢一　九一
二四　境遇（格言）……　九九
二五　岩倉右府その一……井上毅　一〇〇
二六　岩倉右府その二……井上毅　一〇七
二七　全氣全念（口語文）……幸田露伴　一一七
二八　公子の躾方を申遣はす（書牘文）……德川齋昭　一二六

中學國文教科書 卷四目次 終



廣島大學圖書之印

幸田露伴
名は成行。文學博士。（一三七ページ）

中學國文教科書 卷四

## 一 樂地

幸田露伴

如何なる處にも樂しき地はあるべし。又如何なる處にも樂しからぬ地あるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑かに霞み、水緩かに流るゝ春の日に當りても、心よき事のみ懷に滿つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒に怯ゆることもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜

共に萎え屈む冬の時に當りても、うら悲しき事のみの胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のほとりに罪なき話の興を涌かし、ぬく灰はたく煨芋の煖かきに笑むをかしさもあるべし。金殿玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店草屋にも樂しき處はあるべし。事物は大凡只一向ならぬものなれば、いと〳〵樂しからぬが中にも、樂しき處、樂しむべき處もあるべければなり。樂しき處、樂しむべき處を見出し得れば、



如何ほど窮苦不快の中に在りても、人は自らに勇氣を得て、苦中の苦に堪へ忍び、やがて人上の人となり得ることもあるべし。さなきまでも、樂しからぬが中に樂しき地を見出さんことを常に心がけて其の習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も潤く氣もゆたかになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過すやうにもなるべし。樂地を見出すべし。努めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。

昔、或江州の行商人と他の國の行商人と、共に碓氷の

坂路を登り行きける折、夏の日の烘るが如く熱きに、商ふ品の嵩、高く重かりければ、二人とも憊れ苦しみて憩ひけるが、苦しさの餘に、江州のならぬ商人、「碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬはなけれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて歸り去らんとしも思ふなり。」と溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて、「坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむほどは我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我は然おもはず。此の碓氷の山を十程も重ねたる高き山もあれかし。さらば數多き行商人は、皆半途より身も憊れ心も弱りて歸り去るべし。其の時、我一人如何にもして山の彼方に到り、思ふがまゝに商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ。」と云ひけりとぞ。同じ苦難の中に在りても、よく樂地を觀るものは、身撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀、よく〳〵思ひ味はふべきなり。（洗心錄）

## 二　富士雪を帶ぶ

徳富蘆花

富士雪を帶ぶ、さやかに雪を帶ぶ。

秋空何ぞ高き。風威を帶ぶる相模灘の怒號何ぞ壯なる。此の空と此の海との間に、玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。

絕頂より五合目のあたりまで、銀より白き雪は桔梗色の山膚を被ひて、上は隈なく、下はさながら笹緣とれるやうに山を包めり。雪色淸うして點塵なく日光に輝き、水よりも澄める秋の空に襯し、豆相の連山を踏み、萬波雪の如く立騷ぐ相模灘を俯瞰して、秀麗皎潔神威も十倍するを覺ゆ。





能因入道　橘永愷。紫式部等と同じころの歌人。

三島　伊豫國宇摩郡にあり。讃岐に近し。

嶽頂一點の雪、實に富士の秀色神采を十倍せしむるのみならず、さらに四圍の大景に眼睛を點ず。東海の景は富士によりて生き、富士の景は雪によりて生く。（自然と人生）

## 三　關の秋風

能因入道、伊豫守實綱に伴ひて彼の國に下りたりけるに、夏の初、日久しく照りて民の歎淺からざりける に、神は和歌にめでたまふものなり、試に詠みて三島に奉るべき由を、國司しきりに勸めければ、

天の川、苗代水をせきくだせ、
あまくだります神ならば神。

と詠めるを御幣に書きて、社司をして申上げさせたりければ、炎旱の天俄に曇りわたりて、大きなる雨降りて、枯れたる稻葉おしなべて緑にかへりけり。忽ちに天災を和ぐること、唐の貞觀の太宗の蝗を呑めりし政にも劣らざりけり。

能因は至れるすきものなり。

都をば霞とともに立ちしかど、
秋風ぞ吹く、しらかはの關。





坪内逍遙
名は雄藏。文學博士。早稻田大學教授。（一八五九―）

ネルソン（1758-1805）

と詠めりけるを、都にありながらこの歌を出さんは無念と思ひて、人にも知られず久しく籠り居て、色を黑く日にあぶりなして後、「陸奥の方へ修行の序に詠みける。」とぞ披露しける。（十訓抄）

## 四　自恃

坪内逍遙

英佛の艦隊のナイル近海にて將に會戰せんとせし時の事なり、英の水師提督ネルソンは諸將を旗艦に集めて豫ての戰略を示しけるに、大佐ベリー喜びて曰く、「若し此の戰略によりて勝つことを得ば、天下の

驚歎いかばかりならん。」と。提督曰く「若しとは何ぞ。勝利は確實なるを。但し誰が生存して其の情況を報ずるかは別問題なり。」と。

ネルソン

ネルソンが自ら恃むことの如何に厚かりしかを見るべし。

成功の要具一二のみならざるなかに、自ら恃むの德は其の最も緊要なるものゝ隨一なり。自ら恃むとは彼の「自ら助けよ、天汝を助けん。」といふ古語の意を體し、他人の助を俟たずして專ら自己の力を恃み、進んで事に當るの謂なり。

蓋し內より來る助は常に其の人を强うすれども、外より來る助は必ず毎に之を受くる者を弱うす。彼の富貴の子に薄志者の多きは、幼きより起居・眠食共に他人の奉侍を俟つに慣れて、自ら彊むる力を鈍らしめたればなるべし。此の故に新井白石は河村瑞賢の好意を辭し、ドクトル、ジョンソンは贈物の靴を斥けて穢く古きを穿ちたりき。「貧苦・病苦に福音あ

ジョンソン
英國の著作家。
(1709-1784)

り」といひ、「逆境は最も有爲なる者を卒業せしむる學校なり」といひ、「艱難は人を玉にす」といふ。いづれも人は全力を試錬せらるゝ機を重ぬるに及びて、はじめて其の本色を發揮するをいへるならん。古今東西の一藝一術に秀でたる人の傳を讀むに、名人上手の名を少なくとも其の一代に知られたる程の者は、其の修行期の若干頁を血の涙の歴史たらしめざるは無し。されば、彼の金翅鳥とかいふ鳥に佳き音を出さするためには、其の目に燒け針を刺込むといふ話あるも、全くの拵へごとにはあらざるにや。





人生れながらにして才と不才とあり、又健康と病弱とあるは爭ふべからず。これ運命なり。されど、其の才をして大なる用をなさしめ、其の健康を保全して長壽ならしむるが如きは人の力なり。力めて已まずんば、不才をも有用の材たらしめ、病弱をも活動に堪へしむるまでに鍛ひ成さんこと、望みがたきにあらず。人は宜しく人事を盡して天命を俟つべきなり。運命と境遇とが人を殺活することあるは事實なれども、機會を利用するに敏なる者は、自ら能く境遇を造るなり。（中學修身訓）

東郷平八郎
元帥海軍大將
大勳位。
伯爵。
（一三〇六―）

## 五 海軍戰死者ヲ祭ル

東郷平八郎

海陸ノ戰雲已ニ散ジテ、滿都ノ和氣藹々タリ。童幼歡ビ迎ヘテ、六親門ニ待ツ。是、諸子ト生死ヲ共ニシタル將卒ガ大纛ノ下ニ凱旋セル頃日ノ光景ナリ。

回想スレバ、諸子等ガ冱寒ヲ冒シ、炎熱ヲ凌ギ、勁敵ト戰フニ方リテヤ、戰局ノ前途ハ尚未ダ知ルニ由ナク、諸子ノ逝ク毎ニ、マヅ其ノ忠死ノ榮ヲ得タルヲ羨ミ、我等モ亦必ズ諸子ニ倣ウテ君國ニ報ユルヲ期セリ。然ルニ、諸子ノ勇戰奮鬪ハ常ニ其ノ結果ヲ奏シ、皇軍





戰フ毎ニ勝タザルコトナク、旅順ノ連陣十閲月ニシテ大勢ヲ定メ、日本海ノ鏖戰一舉ニ勝敗ヲ決シ、爾後海上敵影ヲ見ザルニ至レリ。是、固ヨリ無量ノ皇德ニ基ヅクト雖モ、又諸子ガ身ヲ外ニ忘レテ奉公シタルノ致ス所ナラズンバアラズ。今ヤ征戰其ノ終ヲ告ゲ、我等凱旋ノ將卒四顧歡喜ノ光景ヲ見ルニ當リ、諸子ト此ノ悅ヲ頒ツ能ハザルヲ懷ヒ、悲喜交至リテ、感慨言フベカラザルヲ覺ユ。然レドモ、帝國ノ今日アルハ即チ諸子ガ一死ノ榮アル所以ニシテ、諸子ノ忠烈ハ永ク我ガ海軍ノ精神ト爲リ、帝國ヲ無窮ニ守

護スベシ。茲ニ典ヲ擧ゲテ諸子ノ靈ヲ祭リ、聊カ懷ヲ陳ベテ、弔詞ニ代フ。尙クハ來リ饗ケヨ。

明治三十八年十月二十九日

聯合艦隊司令長官　東鄕平八郎

## 六　八道の山

大町桂月

大町桂月　名は芳衞。文章家。（一八五九―一九一〇）

八道の山よ、いざさらば。
年の七年戈執りて
踏み荒したる日の本の
益荒雄は今歸るなり。





釜山の浦の秋ふけて
空もしぐるゝ夕間暮、
波路遙に帆を揚げて
汝と今や別るなり。
知遇の恩に身を捨てゝ、
四百餘州をわが駒の
蹄に蹴んと勇みしも
覺めてはかなき夢なれや。
我を知りにし太閤の
世になき後は、誰が爲に

千里の外に戈執りて
異境の山にいくさせん。
恥をしのびて故郷に
歸るも、後に死なんため。
主君の家の行末を
思へば重き命なり。
あはれ太閤世を去りて、
よつぎの主は幼し。
石田・小西の小人ばら
かならず事を誤らん。





わが幼時よりはぐくまれ、
惠にあみし豐臣の
家を護りて死なん身の、
永くは住まじ、世の中に。
跡に見捨つる益荒雄の
亡き魂、若しも知るあらば、
三途の川や六道の
辻にしばらく我を待て。
是を限の見納に、
今一度と見返れば、

千里の外に戈執りて
異境の山にいくさせん。
恥をしのびて故郷に
歸るも、後に死なんため。
主君の家の行末を
思へば重き命なり。
あはれ太閤世を去りて、
よつぎの主は幼し。
石田・小西の小人ばら
かならず事を誤らん。





わが幼時よりはぐくまれ、
惠にあみし豐臣の
家を護りて死なん身の、
永くは住まじ、世の中に。
跡に見捨つる益荒雄の
亡き魂、若しも知るあらば、
三途の川や六道の
辻にしばらく我を待て。
是を限の見納に、
今一度と見返れば、

波音すごく、雨荒れて、
野山は霧に朧なり。
八道の山よ、いざさらば、
國の譽とたゝかひて
花と散りにし日の本の
男子の骨を護れよや。（黄菊白菊）

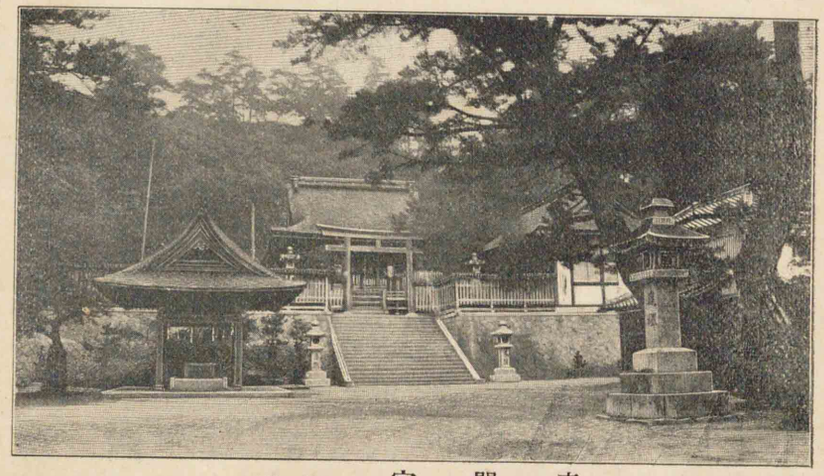
## 七　赤間關

遲塚麗水

幼沖の天子安德天皇。

幼沖の天子龍宮に入り給ひてより茲に七百年、舊によりて山は青々の容を變へず、水は蒼々の色を改めず、更に一新繁華を添へ來りて、豐の門司と共に中國・九州の咽喉を扼し、西國の一大埠頭となりしもの、是を赤間關となす。

所謂壇の浦は市の東、壇浦町の邊數町の海濱なり。浦は後に山を負ひて漁家蜑戸參差相望み、潮聲寂寞として岸を打ちて回る。御裳濯川は壇浦に濺げる小流なり。岸に沿うて老松多し。此の邊の海濱異蟹を產す。甲の上の皺恰も人の憤怒の惡相を作す。呼んで平家蟹といふ。更に小平家と稱する魚あり。形鯛に肖て、金鱗の上に白斑あり、雪の如し。甚だ美



赤間宮（寫眞）

麗なり。俗に云ふ、平家の亡靈男子は化して蟹となり、女子は化して小平家となると」。赤間宮は阿彌陀寺町に在りて安德帝を祀る。もと阿彌陀寺の在りし處。社殿宏壯なり。陰曆三月二十四日大祭を行ふ、呼んで先帝祭といふ。安德帝の御陵は赤間宮の左に在り。一株の老松あ





り、淡墨の松といふ。古歌に

何れより名をあらはさん、薄墨の
松漏る月の文字のゆふぐれ。

といへるは即ちこれ。凡そ此の邊、紫石山を負ひ、海門を前にす。猿啼潮聲兩つながら腸を斷つ。紫石山の下に平家一門の墓あり。兩行相望み、風打雨淋、勒字を辨ぜず。紫石山に登れば硯の海脚下に在り。直に豐の門司と相對し、近く筆架峰を看、右に內裏・新羅崎・百濟野・巖流島を望む。風景甚だ佳なり。龜山神社は、外濱町の邊に在り。左右に蘇鐵樹あり

朝鮮蘇鐵と稱す。豐公手栽のものといふ。社に近く引接寺あり、長州屈指の巨刹たり。寺内に笠松と稱せる老松あり、枝葉四方に蜿蜒し、青繖を張れるが如し。明治二十八年清國講和使李鴻章の旅館に充てたりしより、彼の撙俎折衝の場たりし旗亭春帆樓と共に其の名全國に傳はれり。

赤間關の地、太古は正に九州と一地峽をなし、玄海より硯の海に至る天然の一大石橋を作りきといふ。長街帶の如く波光に涵し、面々の青山萬檣を護る。文字關頭夕暉紅なる處、豐山は濃、筑山は淡、遙に豫州の山の煙紫雲翠幾重々なるを看る。誠に佳矚とす。

（日本名勝記）





## 八 川中島

天文二十三年秋の半ばの頃かとよ、上杉謙信は八千餘騎を從へて川中島に打つて出づ。われ此の度の戰は武田信玄を追つ詰めて、親しく雌雄を決せんと、渦卷き返す犀川を渡りて陣をぞ取りにける。信玄は之を聞くより早く二萬餘騎にて打向ひ、砦をかためて戰はず。謙信は氣をいらち、村上義清に言ひ含

め、月影暗き山々の草葉の露を分けさせて、彼方此方に兵を伏せ、樵夫に擬せる兵を出して、甲斐の兵營に近づかしむれば、甲斐の兵謀とは露知らず、朝霧の間に追ひまくる。待設けたる伏兵は、時こそ來れと勝鬨をどつと揚げつゝ引包み、袋に物を取る如く、一騎も殘さず打取つたり。信玄怒つて軍勢を雲霞の如くに繰出せば、謙信も備を立てゝ打向ふ。龍躍つて雲を起し、虎嘯いて風を呼ぶ。勢破竹の如くにて、入亂れ入亂れ攻戰ふ有樣は、颶風沙を卷き、百雷巖を拔くに異ならず。越後の勢退けば甲斐の軍之を追ひ、





甲斐の軍退けば越後の勢之を追ふ。軍をすること十七度、何れを勝としらま弓ひくかと見えし信玄は、一手の勢の旗を伏せ、川を渡りてよしあしの隙をひそかに忍ばせて、勇み立つたる謙信が旗本近く進み寄り、面もふらず斬つて入る。麾下の軍勢は思はぬ兵に敗られて走る跡より、甲斐の兵鯨波を作りて追

上杉謙信（高野山無量光院藏）

懸くる。宇佐美定行之を見て猛虎の如く憤り、汗馬を驅つて大音にわが手の勢に下知をなし、敵の横合より無二無三に突入つて、淵瀬もいはせず追落す。信玄度を失ひ、流れを亂して走る所を、謙信只一騎、赤の栗毛の逞しきに鞭を當て、「豎子何處まで逃ぐるぞ」。と云ひも果さず切りつくる。信玄刀を拔くに暇なく、軍配扇にて受けたれど、扇は二つに折られたり。

ふると見て笠取るひまもなかりけり、

川中島のゆふだちのあめ。

と歌ひし如く、二の太刀ははや肩先に切込みぬ。あ





つと云ふ間に信玄が命は岩に碎かるゝ泡と消えなん危さを救はんとして、軍兵が心はやたけに勇めども、水はやくして近寄れず。

武田信玄（高野山成慶院藏）

隊將原大隅、槍をのばして謙信を突きはしたれどあだづきし、かくてはならじと槍を擧げ、唯ひとうちにと擊ちたりしに、馬に當りて馬逸す。

謙信馬を鎭めんと、手綱かい繰るその隙に、信玄は虎口を逃れ去りにけり。

鞭聲肅々夜過河。
遺恨十年磨一劍。
曉見千兵擁大牙。
流星光底逸長蛇。

かく信玄を打漏したる謙信が心の中や如何ならん、思ひやるだに哀れなり。信玄は肩の痛手に耐へかねて、その夜の中に軍勢を纏めて、出づる月影に道を求めて、はるゞとわが故郷に歸りけり。（薩摩琵琶集）

尾崎行雄
政治家。司法大臣。（一八五九―）
記者
雜誌「精神」の記者。

## 九　人の問に答ふ

尾崎行雄

記者足下。僕、古今の賢哲・英豪に於て別に偏好する所なし。智あるものは勇なく、勇あるものは智なし。材略に長ずるものは德操を缺き、大節毅然たるものは雄略に乏し。要するに、皆一箇の不具人たるを免れず。故に僕好んで古今東西人の傳記を讀むと雖も、只其の長所に就いて之を師友とするに過ぎず。一讀爽然、景慕止む能はざるものに至つては、僕未だ其の人あるを知らず。然れども、强ひて愛好の深淺を較すれば、彼、此より深きものなきにあらず。不識庵謙信の如きは、僕が景慕心の傾注すること、深き者なり。

彼、不幸にして北陬に生れ、上國の形勢に暗し。故に

其の計圖未だ偏小なるを免れずと雖も、猶天下を席卷し、宇内に號令する志なきにあらず。　特に其の豪快義俠の氣質に至つては、高く戰國の諸將に傑出す。之を古今・東西に求むるに匹儔あることなし。　彼既に義にして亦智、既に勇にして亦仁、加ふるに勤王の至情を以てす。　天若し之に年を假さば、其の成就する所、豈越山併得能州景を賦するに止らんや。　彼、素より身命を賭して信玄と爭ふの愚なることを知る。然れども、雄圖・壯望あるがために其の義俠心を矯抑せず、勇往邁進、人生復他望なきものゝ如く然り。　眞

越山併得能州景

霜滿二軍營一秋氣清。數行過雁月三更。越山併得能州景。遮莫家鄉憶二遠征一。

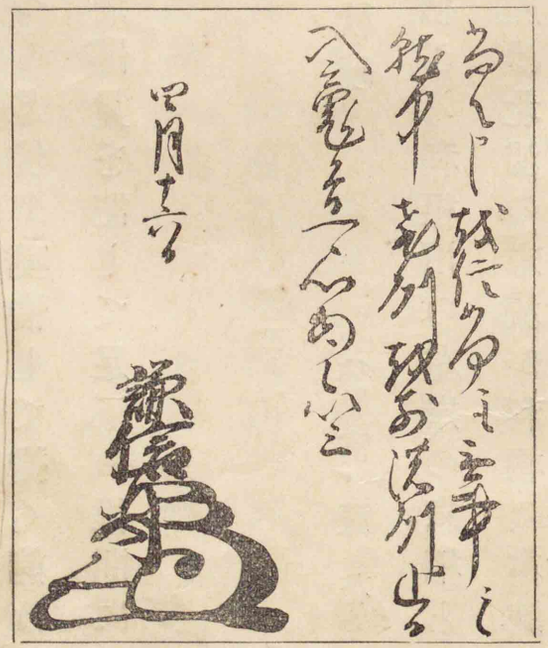


に是、援弱抑強の天使にして、亦義俠心の凝結體なり。其の劍を横たへて能州の月に吟ずるに至りては、豪爽濶達、人をして覺えず唾壺を擊破せしむ。　彼をして上國に生れしめば、信長素より雄圖を逞しうする能はず、豐太閤亦陪臣を以て終らんのみ。　惜しいかな、彼、人和を得て天時を得ず、

筆蹟

尙々申候越信如何にも無事に候就中飛州越前濃州近日入魂候間可心安候以上

四月十六日　謙信



上杉謙信筆蹟（史徵壓寶）

天時を得て地利を得ず、壯圖未だ上國に伸びずして、將星既に北阪に落つ。是、僕が嘆惜して措く能はざるところなり。聊か鄙見を記して足下の推問に答ふ。（古人評論）

## 一〇　利根川の秋曉

徳富蘆花

息栖　常陸國鹿島郡息栖村。

小見川　下總國香取郡小見川町。

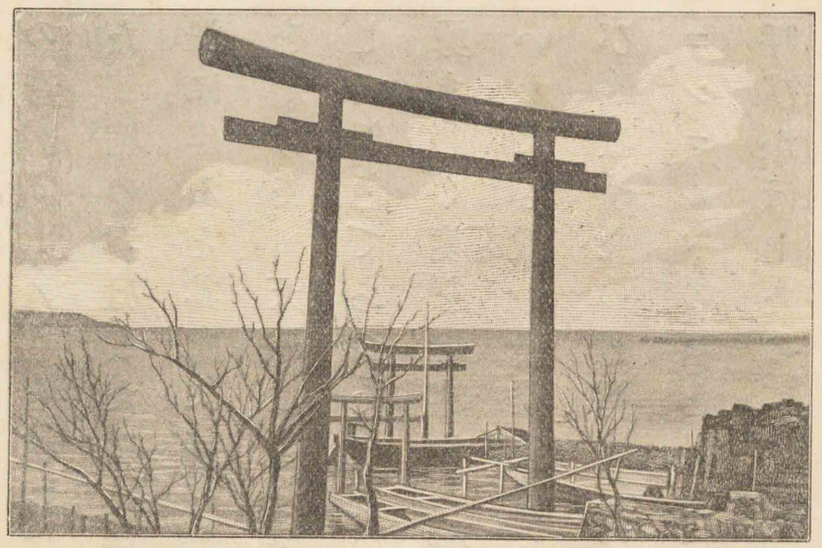
先年の秋十一月の初ごろ、利根川の左岸の息栖と云ふ處に泊つた。此處は北浦の末流が利根の本流と落ち合ふ處で、川幅が濶く、對岸の小見川までは小一里もあらう。宿はすぐ水邊で、夜半に眼を覺すと、櫓



チェルシーの賢　カーライル（1795—1882）

コンコルドの哲　エーマソン（1803—1882）

の音がぎい〳〵と枕頭に聞える。翌日、黎明に起きた。宿の者はまだ寢て居る。そつと戸を明けて河邊に出ると、其處に薪が積んである。霜を拂つて腰をかけた。天地はまだほの暗い。空も河面も茫として鉛色であつた。裏の方の暗い小屋の中で、雞が勇ましく曉を告げると、餘程たつて、川向ふの方から、いかにも微かな雞の聲が聞えた。大河を隔てゝ呼びかはす此の雞聲は實によい。チェルシーの賢とコンコルドの哲とは實に此の如く大西洋を隔てゝ呼びかはしたのであらう。自分の眼には、曉は此の



息栖神社大鳥居（寫眞）

兩岸の雞聲の間から川面に涌きあがつて來る樣に思はれた。

暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて來た。と見ると、川面も薄紅を流して、ほやり〳〵水蒸氣が見えて來た。實に迅い。瞬をする間もないので





ある。夜は川下の方へ流れて、曙の光は四邊に滿ちてゐる。雞はなほ鳴きつゞけてゐる。空と水との薔薇色が少し褪ふ。忽ちきら〳〵とまばゆき光が水にうつる。振返つて見ると朝日は杲々として今息栖の宮の森の梢を離れたのである。折柄その森の塒を離れた烏が一羽、朝日を負うて、さながら曉を告げ渡る神使の如く、凛とした朝の大氣に羽を搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川はまだ蒼々とした朝霧の中に眠つて居る。

對岸はまだ眠つて居るが、こちらの村は最早覺めた。

うしろの小屋から煙が立上る。今棚を出た家鴨は足跡を霜につけて、くわつ〳〵と呼びながら、朝日を碎いて水に飛込む。水楊の枝に小鳥が囀る。今起きて來た村人が白い息を吹き〳〵川に下りて、河水を掬んで口を嗽ぎ顏を洗ひ、それから遙に筑波の方へ向いて、掌を合せて拜んで居る。「あゝ、實に好い拜殿である。」と自分は思つた。（自然と人生）

## 一一 秋の夜

幸田露伴

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光はをさなき





童の髪の如し。めでたきこと誠にめでたし、なつかしきことも誠になつかし。されど、猶いさゝか物足らぬ心地す。冬の月は水晶もて作れるものを見るが如し。清さは餘りありて味無きに近し。夏の夜の月の團々と大いなるが、海原の果より、松の樹の間より、又は市中の甍の浪間より出でたる、目ざましく、心ゆくものにて、夜の景色も快くをかしけれど、たゞ我が魂の世に浮かるゝをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身に浸み入るやうなるを覺ゆることなし。

秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。中の秋の五

日・六日の月の、ふと見る夕暮の空に出で居りて、雜木の梢、もろこしの垂葉などに風かすけく呼く、まづおもしろし。遠山黑く暮れて、素月、輝を揚げ、庭樹のそれ〴〵潤葉・纖葉の葉表の照、葉蔭の闇、おのがじし畫趣を爲し、詩情を作りて、合して爽凉清澄の景を釀し出すさま、いづくにも有りふれたることながら好し。夜更け、蟲吟じて、世の中靜なる時、たま〳〵燈前に書をさし置きて、起つて廊を歩むをりから、窓の白きを看て戸をおし開きて出づれば、月天心を過ぎて光華六合に瀰り、霜に澄める夜の氣は水まさに凍らんと欲するが如くなる、身心頓に此の世のものならずなりたるやうに覺えて、秋ならでは、夜ならでは、月ならではと思はる。（洗心錄）

新井白石
名は君美。將軍家宣の侍講。（一六五七―一七二五）

## 一二　わが幼時

新井白石

わが六歳の夏の頃、上松といひし人のすこし文字などありしが、七言絶句の詩一首教へてその意を解き聞かせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしをば、人にも講じ聞かせたりき。

「この兒文才あり。いかにも師を擇びて學ばしめら

るべし」など彼の人もいひしかど、かたくななる昔人たちのいひしは、「昔より言ひ傳へしことあり、『利根・氣根・黄金の三こんなくしては學匠にはなり難し。』といふなり。この兒、利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くしてその氣根の事もはかり難く、家富めりとも見えねば黄金の事心得られず」などいひあひき。わが父も「戸部の御慈しみによりて常に傍を離れ參らせず。學に入れ師に從はしめん事も叶ふべからず。されど、幼きより、物書く事をば戸部も人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて物をば書き習はしめたく

戸部 民部の唐名。土屋民部少輔忠直を指す。





こそ侍れ」とて、わが八歳の秋、戸部の上總國にゆき給ひしあとにて、手習ふことを教へしめらる。

新井白石

その冬の十二月半ば、戸部歸り參られしかば、常に傍にさぶらふ事故の如し。あけの年の秋また國にゆき給ひしあとにて課を立てられて、「日のうちには行・草の字三千、夜に入りて一千字を限り

て書き出すべし」と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課はまだ滿たざるに日暮れんとする事度々にて、西向なる竹緣のある上に机を持ち出でて、書き終へぬる事もありき。又夜に入りて手習ふに、睡けの催して堪へ難ければ、われに附けられしものと竊に謀りて水二桶づつ彼の竹緣に汲み置かせて、いたく睡りの催しぬれば、衣脱ぎ棄てゝまづ一桶の水をかぶりて衣打着て習ふに、初は冷かなるに目さむるこゝちすれど、しばし程經ぬれば、身暖かになりて又々睡くなりぬれば、又水をかぶる事さきの事





の如くす。二たび水をかぶりぬるほどには、大やうは課をも滿てたりき。これわが九歳の秋・冬の間の事なり。

かゝりし程に、この頃よりは、わが父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて十日のうちに淨寫してまゐらすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、册になして戸部に見せまゐらす。褒め給ふこと大方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふ程の文ども、

大方は我に命ぜられき。

又十一歳の時に、わが父の友に關といひし人の子どもは太刀打のわざに勝れて、人に教ふる事ありしを、我にもこの技教へられんことを望みしに、「わぬしまだ幼し。此等の技學ばん事なほ早かり」といふ。「さこそ待るべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらんには、刀・脇差腰にせん事誠に不用の事にや」と言ひしかば、「のたまふところ誠に然なり」とて、一つの技を傳へて習はしめたり。かゝりし程にその年十六になりし者の我と藝を試みんといひしかば、木刀をとり



て三たび合ひて三たびまで勝つ事を得たりしにぞ、人々もまた興に入つて笑ひける。（折焚く柴の記）

## 一三　讀書

坪内逍遙

常に良き著述に親しむ者は、只獨り居れども寂しきことを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり。失意にも慰み、不平・憂悶も之を忘る。「書は少年の滋味にして老年の娯樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰諭とを與ふ。家に在れば心を樂しましめ、外に出でたる時も邪魔とはならず。

シセロ
(106-43B.C.)

「夜の伴、旅の伴、僻地の伴」と羅馬の名士シセロの言ひたるも同じ心なり。されど、かくの如きは人の讀書より受くる最大の利益にはあらず。

諺に「百聞一見に如かず」といへるは、何事も其の身親しく經驗するに如かずといふ意味なれども、人の壽命に限あれば、七十・八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽くことは幾何もあるべからず。我が日本國内の山水・風俗だけにても一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大なるを思ひ、時の窮なきを思へば、人間一身の經驗の狹く、淺く、小さく、且少なかるべき





は言ふにも及ばぬ事なり。さればこそ今も昔も苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人々は、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得て之に親しまん事を願ふなれ。所謂名著は人間世界開けてこのかた凡そ三千年間に出でたる大賢・高德・碩學・大才の經驗・觀察・思索・想像をそのまゝに、又はランビキにかけて傳へたるものなり。或は顯微鏡・望遠鏡に譬ふるも可なり。固より人工に成りたるものなれども、人をして肉眼にて看得ざる微なるものをも、

遠く且大なるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして良書の助を藉ることなく、只其の貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も人間界の事も僅に一斑を窺ふに過ぎざるべく、其の一斑さへも正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに、書は知識の寶庫にして、兼ねて智を研く砥石なり。しかしながら讀書の用は尚之に盡きたるに非ず。

ペトラルカ（1304-1374）

伊太利の詩人ペトラルカは曰く、「予に良友あり。彼等皆名士・大家にして、いづれも偉業を成したる者なり。予若し其の助を藉らんとすれば、彼等は喜んで



我が請を容る」と。是、良書が常に其の讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、奬勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニング（1780-1842）も曰く、「吾人が、傑出せる心と相語ることを得るは、おもに書籍の媒介に因る。而して、かゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑、吾人に對ひて語り、其の最も貴き思想を吾人に與へ、且其の心靈を吾人の爲に吐露す」と。英國の詩人ミルトン（1608-1674）もまた曰く、「良書は保存蹈襲して後世に傳へられたる俊傑の貴重なる生血なり」と。

人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大なるに驚き、或は品性の高きに感じ、「嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく偉なることかくの如きものもあるか。」と歎ずるなり。若し假初にも其の偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、之に倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書の用極れるにちかしといふべし。（中學修身訓）

國木田獨歩
名は哲夫。文學者。（一八七一―一九〇八）

## 一四　武藏野

國木田獨歩

昔の武藏野は目のとゞくかぎり萱原であつたやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。林の木は重に楢の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新綠が萌え出る。其の變化が秩父山脈以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠陰に、紅葉に、樣々の光景を呈する。其の妙は一寸西國地方又は東北の者には分りかねるのである。

楢の類だから黃葉する。黃葉するから落葉する。

時雨が私語く、風が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉が高く大空に舞つて、小鳥の群の如く遠く飛び去る。木の葉が落ち盡せば、數十里四方に亙る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄み渡る。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の日記に、「林の奥に坐して、四顧し、傾聽し、睇視し、默想す。」と書いた。此の傾聽といふことがどんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心に適つて居るだらう。秋ならば林の





中より起る音。冬ならば林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車・荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴ちらす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乘に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠ざかりゆく。獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃の音。ことに時雨の音に至つては、これほど閑寂なものは

ない。山家の時雨は我が國でも和歌の題にまでなつて居るが、廣い野末から野末へと林を越え、杜を越え、田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り過ぎる時雨の音の、如何にも幽かで又鷹揚な趣があつて優しく懷かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。

自分は嘗て北海道の深林で時雨に逢つたことがある。これは又人跡絶無の大森林であるから、其の趣は更に深いが、其の代り、武藏野の時雨の更に人なつかしく私語くが如き趣はない。（武藏野）



關中　函谷關以西。
劉邦　名は季。漢の高祖。
項羽　名は籍。

## 一五　鴻門の會

大町桂月

楚の懷王諸將に約すらく、「まづ秦を破りて關中に入らんものを其の王とせん。」と。劉邦まづ入りぬ。もと懷王は項羽を嫌ひて劉邦を愛し、邦をして進み易き路を取らしめたれば、苦戰もせずに易々と入ることを得たるなり。項羽は正面攻撃をなして最も苦戰し最も功勞ありたるが、關中に入ることは邦より後れたり。關閉ぢたり。是、邦の閉せる所なり。羽怒り、關を破つて入り、鴻門に陣す。その兵四十萬、百

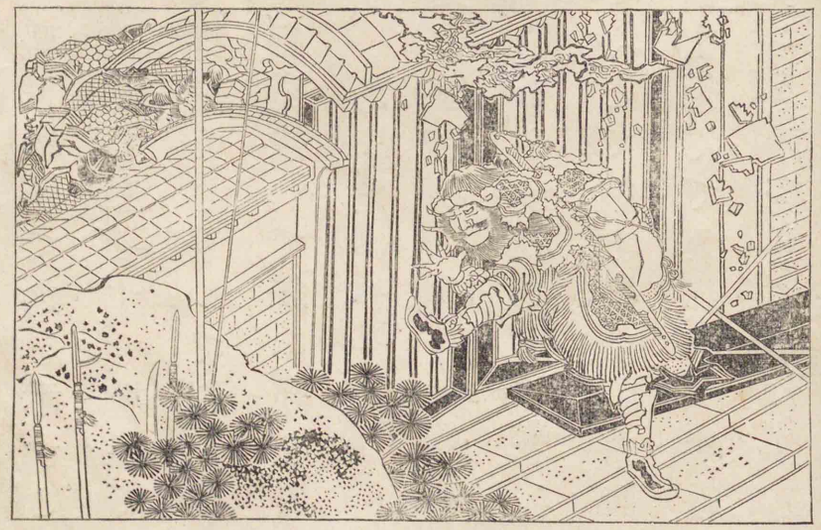
萬と號す。邦の兵十萬、覇上にあり。羽、謀臣范增の言を聞いて邦を殺さんとす。邦はその謀臣張良の言に從ひ、良と共に百餘騎を率ゐて往いて謝す。こに邦にとりて仕合せなりしは、羽の叔父の項伯が良の親友なりしことなり。良の身を氣の毒に思ふより、その主の邦をも氣の毒に思ひ、一方には增の謀を良に洩して來り謝するやうにせしめ、一方には羽をなだめて、茲に鴻門の會は起りたるなり。

羽と伯と東嚮して坐し、增南嚮して坐し、邦北嚮して坐し、良西嚮して坐す。項羽の怒りしは邦の左司馬





曾無傷の中傷に由ることと明かになりて、事一先落着し、今や酒宴正に酣なり。されど雷雨歇みたる空なほ暗し、いつ霹靂を生ずるかも知るべからず。增はあくまでも邦を殺さんとす。羽は猛勇鬼をもひしげど涙脆き人なり。增、羽に



樊噲軍門に入らんとす

目くばせして佩びたる玉玦を擧げて之を示すこと三たびに及べども、羽默然として應ぜず。增出でて項莊を呼ぶ。項莊入りて壽をなし、畢つて劍を拔いて舞ふ。項伯も亦起つて劍を拔いて舞ひ、邦を蔽ふを以て、莊擊つことを得ず。あゝ危いかな。張良急いで軍門に至り、樊噲を見る。噲問ふ、「今日の事如何」。良告ぐるに事の急なるを以てす。「さらば我請ふ入つて死を共にせん」とて、劍を帶び盾を擁して、軍門に入らんとす。衞士拒んで入れず。噲、盾にて突き倒して入り、帷をひらき、西嚮して立ち、目を張つて項王を視る。頭髮豎立して目眦悉く裂けたり。羽曰く、「客は何者ぞ」。良曰く、「我が君の侍士樊噲といふ者なり」。羽曰く、「壯士なり」。やがて大盃に酒をなみなみとつぎて飲ましむ。噲拜謝して起ち、一呼して飲みつくす。肴にとて生の豚肉を與ふ。噲、盾を俎にして劍を拔いて切つて食ふ。羽曰く、「またよく飲むか」。噲曰く、「臣死をだに避けず、一斗や二斗の酒何ぞ辭するに足らん。夫、秦は暴逆なりしを以て天下之に叛けり。我が君まづ秦を破つて咸陽に入り、秋毫も侵す所なく、宮室を封閉し、還つて霸上に軍し、

以て大王の來るを待てり。殊更に將をやりて關門を守らしめたるは、他の盜賊の出入と非常とに備へたるなり、大王を拒まんとせるに非ず。勞苦して功高きこと此の如し。然るに未だ封侯の賞あらずして、却て妄人の言を聽いて有功の人を殺し給はんとす。是、暴秦の二の舞なり。臣ひそかに大王のために取らざるなり」。羽未だ答へず、たゞ「坐せよ」といふ。噲、良の側に坐りぬ。間もなく、邦去つて厠に行き、噲を手招きして共に出づ。羽、陳平をして邦を召さしむ。邦曰く、「挨拶せずして





還るも失禮なり。如何にかすべき」。噲曰く、「大行は細謹を顧みず。今や他は刀俎にして、我は魚肉なり。何ぞ挨拶するを要せん」とて終に虎口を脱れ出でぬ。良を留めて、よき頃を見計らひて入つて羽に謝せしめて曰く、「我が君もと酒量なし。今日大王の饗をうけて飲み過し、苦しさの餘り挨拶をもなさずして歸られたり。臣をして代りて謝せしめらる。白璧一雙大王に上り、玉斗一雙范公に獻る。願はくは我が君の心をうけさせ給へ」。羽問ふ、「劉君は今何處にかある」。良答ふ、「大王あまり酒を強ひ給ふを以て、身を

脫してひとり去られぬ。今は覇上に到られたるならん。」羽、璧をうけ座上に置きて餘念なし。范增は玉斗を受けしが、之を地に置き、劍を拔いて突き碎いて曰く、「あゝ竪子共に謀るに足らず。將軍の天下を奪はんものは必ず劉邦ならん」と。

英雄・豪傑・謀臣・勇士、一堂に會し、殺氣紛々たる間に樊噲の勇一座を壓し、痛飲健啖、口を開いて虹霓を吐く。鴻門の會は實に宇宙有數の一大快事なり。（我が文章）

## 一六　北京の四時

宇野哲人

宇野哲人　東京帝國大學文科大學助教授。（一八五五）





故國ならば、鶯の歌に夢を覺し、心樂しく床を離れる此の頃であるが、北京では黃鳥などは思もよらない、唯騷々しい鵲の聲、雀の囀を聞くばかりである。「春眠不レ覺レ曉。處々聞二啼鳥一。」と云ふやうな長閑な趣は、江南一帶の風光で、北京には殆ど見ることが出來ないのである。

春眠不レ覺レ曉　唐の孟浩然の詩。

併し乾燥した北清の空の、常に一點の陰翳すら無いほど澄み渡つて居るに、朝日影僅にさし出る頃、忽然として仙樂を天に聞くのは妙である。支那人に聞くと、是は鳩の足に結び付けてある鳴鑾（メイラン）と云ふもの

で、鳩が飛ぶに從ひ、風を受けて鳴るのであると云ふ。花も咲かず、鳥も歌はず、滿目荒凉たる此の地で、かゝる仙樂を聞くのは實に愉快といはねばならぬ。

午後になると毎日風が起る。沙塵濛々、最も甚だしい時は滿天俄に搔曇つて、室内暗黑となり、晝も燈火がほしい程である。所謂黃塵萬丈と云ふのは、決して例の支那流の誇大の言では無い。

晩春から首夏にかけての新綠は、初めて蕭條たる北京の天地をして活氣あるものと化せしめる。城壁の上に杖を曳くと、四望全く綠の天地となつて、西山





一帶も靑んで見える。併し冬の間氷に封じ込められた一切の不潔物は、俄に蒸發を始めて一齊に惡臭を放ち、且大陸の常として炎暑が酷烈な爲に、愉快を殺ぐこと一通りでない。其の爲に大なる邸宅では、天棚と云つて、屋根ほどの高さに葭簾張の日蔽を作つて、暑を避けて居る。

澄み渡つた北淸の秋は、實に胸襟の爽快を覺えしめる。午ち陰、午ち晴、變り易い秋の空も、北淸では絕えず快晴である。騷人墨客も中秋に雲を恨む必要は無い。氣候も寒からず、暑からず、時には馬に騎つて

郊外の遠乘を試みるのも快心の至である。春夏の際に北京に來た人は北京を惡口すること一通りでないが、涼秋八月、北京に遊ばうものなら、誰でも北京に心醉せぬ人はあるまい。

冬の寒いのは何處も同じことであるが、北京の春に風が多くて冬に風が少ないのは、何よりも嬉しい。氣溫は零下十五六度に下るけれども、家屋の構造が防寒に適して居るので驚くには足らぬ。殊に北京城を繞つて居る護城河中に氷滑を試みるのは快心此の上もない。唯降雪が少なくて、所謂北京八景の一なる西山霽雪の美觀を見る機會の多くないのを恨むのみである。（支那文明記）

## 一七　元祿の地震

新井白石

癸未
元祿十六年。

われ初、湯島に住みしころ、十六癸未の年十一月二十二日の夜半過ぐる程に、地夥しく震ひぬ。驚きて目覺めぬれば、腰の物ども取りて起き出づるに、こゝかしこの戸障子皆倒れぬ。妻子どもの臥したる處に行きて見るに、皆々起き出でたり。屋の後の方は高き崖の下に近ければ、皆々引具して東の大庭に出づ。

「地裂くることもこそあれ」とて倒れたる戸ども出し並べて、其の上に居らしめ、やがて新しき衣に改め、裏打ちたる上下の上に道服着て、「われは殿に參るなり。召仕の者二三人ばかり來れ。其の餘は家に留れ」と云ひて馳せ出づ。道にて息の切るゝこともあらんと思ひしかば、家は小舟の大きなる浪に動くが如くなる内に入りて、藥器尋ね出して傍に置きつゝ、衣改め着し程に、彼の藥の事をば打忘れて馳せ出でしこそ恥づかしきことに覺ゆれ。

かくて馳する程に、神田の明神の東門の下に及びし

神田の明神　今の東京市神田區宮本町に鎭座。



比に、地又夥しく震ふ。こゝらの商人の家は皆々打明けて、多くの人の小路に集り居しが、家の内に燈の見えしかば、「火こそ出づべけれ。燈打消すべきものにこそ」とよばはりて行く。昌平橋のこなたにて景衡の我が方に馳せ來るにゆきあひて、「跡の事よきに計らひ給へ」と云ひ捨てゝ行く。

橋を渡りて南に行きて、西に折れて、又南せんとする處に、馬を立てゝある者を月の光に見れば、藤枝若狹守なり。これは地の裂けて水の涌き出づれば、其の深さ廣さの測り難さに、かくてありしなるべし。「續

景衡　朝倉餘一。白石の妻の弟。

藤枝若狹守　甲府の臣にて、後、幕府に仕ふ。

けや、ものども。」と云ひて一丈あまりになりて流るゝ水の上を跳ね越えしに、供なる者ども同じく越えぬ。其の水越えし時足をうるほしければ、草履の重くなりて行きがたかりしかば、改めはきて馳す。神田橋のこなたに至りぬれば、地又夥しく震ふ。多くの箸を折るごとく、又蚊の集り鳴く如くなる音の聞ゆるは、家々の倒れて人の叫ぶ聲なるべし。石垣の石走り、土崩れ、塵起りて空を蔽ふ。かくては橋も落ちぬべしと思ひしに、橋と臺との間三四尺ばかり崩れしかば、跳り越えて門を入りしに、家々の腰板の離れて



大路に横たはれる、長き帛の風に飜るがごとし。

（折焚く柴の記）

黒田清綱
樞密顧問官。子爵（一四九〇―）

藤原爲兼
鎌倉時代の公卿。歌人。（一一九二）

## 一八　やつかほ

○

やつかほの花のうつろひたるなりけりあひて
門田れふ萩ちなさきたるかな

黒田清綱

○

とよまるるつきと宿をを月さあらかまきて
あすの道ゆくよはのたひ人

藤原爲兼

小出粲
明治の歌人。御歌所寄人。（一八四九―一九〇八）

香川景樹
江戸時代の歌人。（一七六八―一八四三）

紀貫之
平安時代の歌人。（―九四五）

○

村雨のなごりは雲のゆきあひ

そらにあふ峯のもみぢ葉　小出粲

○

おほつかぬ木ぬれのみゆる三日月も

ちりはうせなるこずゑのうぐひす　香川景樹

○

月ぞすむあれみなまでふる寺の

さむき垣根の孤なるあり　小澤蘆庵

○

きのふとくらしてあすの川

なかれてはやき月日なりけり　紀貫之



三宅雪嶺
名は雄二郎。文學博士。（一八五〇―）

## 一九　歳の暮

三宅雪嶺

幼時は日月の過ぐるの遲きに堪へず。「稚子慇懃向人問、睡過幾日是新正」。齡漸く長じて漸く其の速なるを感じ、更に長ずるに及び、「今年は今年はとて暮れにけり」の感あり。又更に長ずるや、白駒の隙を過ぐるの歎あること愈切。遂に顧みて恍として夢の如くなるに至る。時間に差なくして感情に差あるこ

と亦甚だしと謂ふべし。かくの如きは種々の事情に由來すべけれども、其の主たる所由は言ふ迄もなく人事の忙閑如何に在り。

幼時は簡單なる遊戯を事とし、日に同一事を繰返すに止り、何事か單調を破るものあらんを望み、節供・祭日を悦ぶと同じく、歳末・年始をも悦び、頻りに其の到來するを待つ。漸く長じて爲すべき事多きを加へ、動もすれば、日を忘れ、改歳を思ふこと隨つて薄し。更に長ずれば從事する所の業務益〻繁く、或は二三年に跨るあり、或は一層長きあり、數年に亙るが如きは





事業の完成を待ちこそすれ、歳末・年始に何の興味を覺えず、唯「またか」と言ふに過ぎず。

歳末・年始に重きを置くは、其のなほ幼稚なる時の事にして、長ずると共に之を輕んずる傾向あり。日月の過ぐるを忘るゝは爲すべき事業の多きが故にして、烏兎匆々を歎ずるは寧ろ其の人の爲に祝すべし。境遇に順なるあり、逆なるあり、憂慮の餘りに事を忘るゝもあれども、多數の上よりせば日常の業務に忙殺せらるゝなり。

されど四季の循環は昔日の如し。人皆寒暑を感ず

南郭 服部南郭。（一六三四―一七一九）
徂徠 荻生徂徠。（一六六六―一七二八）
ジョン、アダムス 米國第二次の大統領。（1735-1826）

る上は、全く歳末・年始を度外視する能はず。南郭が徂徠の許に年賀に赴きしに、その蓬髪垢面にして滔滔孫子を論ずるに會ひ、其の儘に辭し去りしも面白けれど、ジョン、アダムスが壯時、日誌を記し、十二月末日に至り「今年何事を爲しゝかを省みて憮然たらざるを得ず、明年は大いに黽勉せざるべからず」と云ひしは更に面白からずや。（題言集）

## 二〇 寒稽古

控室に掲示あり。「劍道寒稽古は愈〻明日より開始せ



らる」。

いでや新しき年の首途に猛く雄々しく戰はん。籠手の破も繕ひたり、竹刀の拵も調ひたり。常にはいざたなき吾なれど、誓つて遲刻はすまじ。おくれは武士の禁物ぞ。今宵は早く寢に就かん。

目覺し時計の音す。はや五時になりたるか、一夜は既に過ぎたるか。暖き寢床の離れ難くもあるかな。さばれ昨夜の誓、この一秒の逡巡こそ吾を最後の暗黑に導く惡魔なれ。早く〳〵と響く鈴の音。いざやとばかり衾を蹴て起きあがり、支度そこ〳〵道場

に急ぎ行く。

待ちかね顔なり、電燈の光。半ばは眠のさめやらぬげなる人々も、面を被り、胴をつけ、竹刀をとれば、はや活動の人なり、覺醒の人なり。面を打ち、胴を拂ひ、籠手を切り、喉を突く。拂つては打ち、打つては拂ふ。飛込む足音、打込むかけ聲。我を忘れし難戰苦鬪の間にも「めん」と打たれて「頂戴」と叫び、「籠手」と切られて「まゐり」とかへす。一絲亂れぬ武士の作法。ワーテルローの勇將ウェリントンをして見しめなば、「旅順の堅壘を陷れしものこの裡にあり」とや云はん。

ワーテルロー　白耳義の中部、一八一五年英將ウェリントン(1769—1852)が英普二國の兵を率ゐてナポレオンを敗りし古戰場。

空に輝く星影は目にも入らず。窓打つ風は耳にも入らず。流汗淋漓冬猶熱し。臥床の上の懈怠心、今はた何處にある。一擊一擊又一擊、夜は既にあけはなれ、望の色は東の空を染めて美しく、彼方に聞ゆる雞の聲さへ勝鬨をあぐるかと思はる。

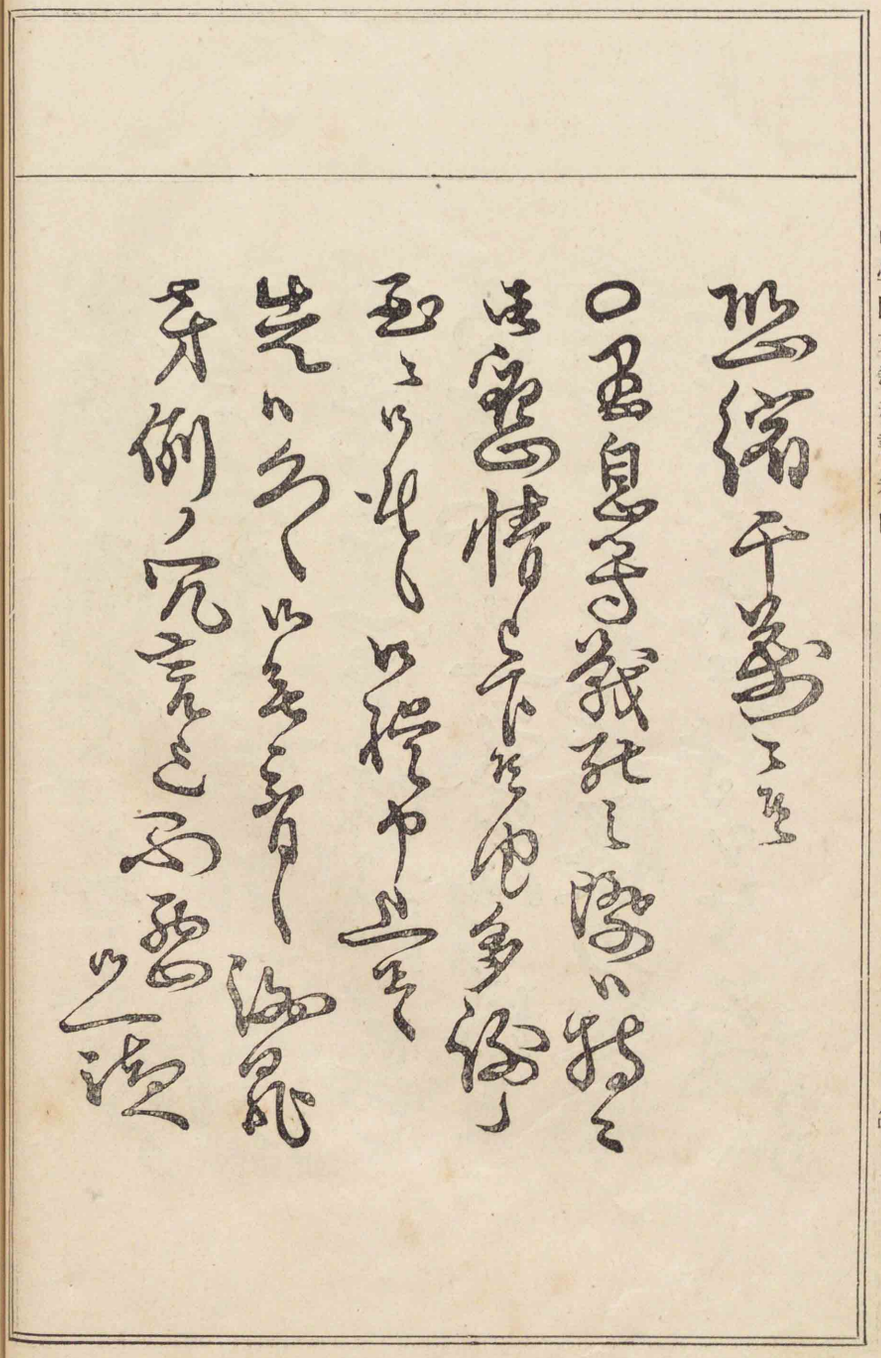
六時半頃稽古を終へ、汗を拭きつゝ家に歸る。己に克ち、自然に克ち、人に克ち得て朝食に向ふ心地よさ。また來ん朝も來ん朝も、今朝の愉快を例にて常に勝利の人となり、なすべきことをなし了へてこの一年を凱歌の裏に送らん。

乃木希典
舊長州藩士。
陸軍大將。
功一級伯爵。
（一八四九―一九一二）

## 二一　寺内大將に贈る

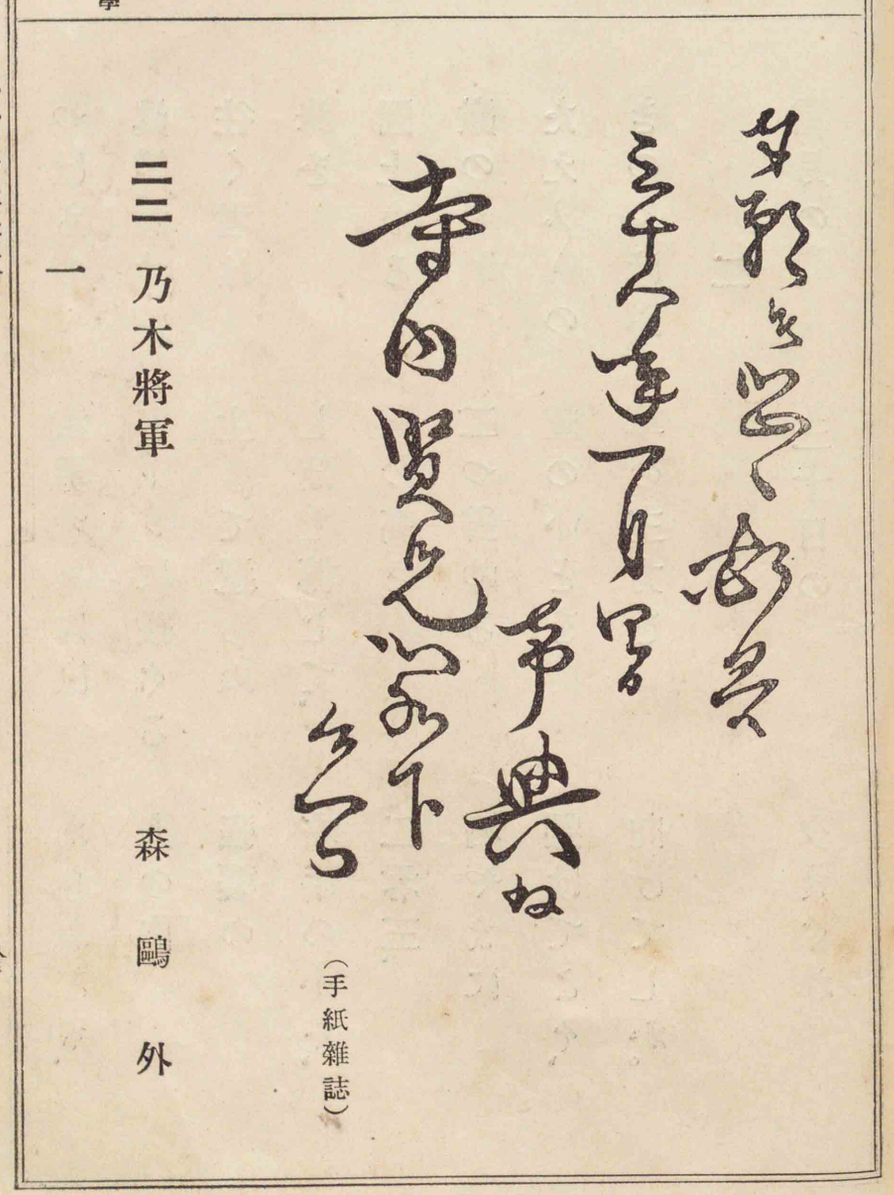
乃木希典

我年已慶月紀
中間屢接
所過之處
皆人多歡
呼好手而
書問慚愧
須臾平地根乳
氣味一一
尚方面一一
年賀年第
上に對して





森鷗外
名は林太郎。文學博士醫學博士。（一八六二―一九二二）



## 二二　乃木將軍

一　　森鷗外

（手紙雜誌）

つはものゝ　武勇なきには　あらねども、
眞鐵なす　ペトンに投ぐる　人の肉。
往く者は　生きて還らぬ　强襲の
鋒を　しばし轉じて、　右手のかた、
圖上なる　標の高さ　二零三、
巔の　二つ聳ゆる　石やまに
たえぐ〳〵の　望のいとを　懸けてこそ、
きのふけふ、　軍の主力を　向けてしか。

二

霜月の　三十日の　夕まぐれ、





將軍は　高崎山の　師團より
たゞ一騎、　柳樹房なる　本營に
歸らんと、　曲家屯をぞ　過ぎたまふ。
ほの暗き　道のほとりを　見たまへば、
身うち皆　血に塗れたる　卒ありて、
そびらには、　はやこときれし　將校の
亡骸を　かきのせてこそ　立てりけれ。

三

「汝は誰そ。　そを何處にか　負ひてゆく。」
「聞召せ。　背負ひ奉るは　奴わが

主と頼む　乃木將軍の　愛兒なり。
年老いし　將軍の家の　二人子、
そのひとり　勝典ぬしは　いちはやく
南山に　うたれ給ひて、　殘れるは
おとうとの　保典のぬし　ひとりのみ。
背負へるは　その一人子の　亡骸ぞ。

四

父君は　心をゝしく　我が主をも
隊附の　まゝにあらせて、「討死の
身の果は　おのれと三人、　葬をば





ひと時に　營め」と宣り　給ひしを、
人々の　强ひて計らひ　つるにより、
さいつ頃　友安旅團の　副官に
職かはり、　まだ程經ぬに、　この朝開、
あへなくも　空しき骸と　なりましぬ。

五

果てましゝ　處は高地　二零三。
目鏡もて　敵の備を　望みます
うら若き　額のたゞ中　打ちぬかれ、
ひと言を　のたまはん　ひまもなく、

持口の　南の峰に　うせたまふ。
その骸を　奴背負ひて、　この村に
ありと聞く　野戰病院　たづぬれど、
くるほしき　心からにや　たづねえず」。

六

かくいふを　駒をとゞめて　聞きましゝ
將軍は　病院の旗　ある方を、
鞭あげて　「彼方にこそ」と　さし給ふ。
面ざしは　たそがれ時に　見えねども、
目ざとくも　雲の絶間ゆ　覗ひし、



さむ空に　まだ輝かぬ　冬の星、
更闌けて、　友なる星に、　「將軍の
睫毛だに　動かざりき」と　語りけり。

（うた日記）

## 二三　簡易生活

芳賀矢一

大椿といふ人は豆をかぢつて苦學をした。修業の間は、弊衣粗食に甘んじて、玄關番となつても苦學するといふのが我が學生の美風である。佛教徒の修業にも弊衣粗食を方便としてゐる。「菜根を咬み得

芳賀矢一　文學博士。東京帝國大學文科大學教授。

大椿（一三二七―）　室町時代の九州の人。

て百事做すべし」といふのが信條である。この衣食住に簡易であるといふことが、總じて日本人の古からの美風ではあるまいか。

上代の衣服は概して白いもので、何等の裝飾も無かつた。曲玉の樣な珠をかけた事は物に見えてゐるが、これとても今日から見れば粗末なもので、しかもそれは高貴の人に限られたらしい。文明の發達しない野蠻人でも、裝飾を好む國民は鳥の羽を附けたり、獸の毛を附けたり、貝を飾つたりするが、日本には其の風が無い。





文明の進むに從つて種々の贅澤の起るのは自然の事で、奈良時代・平安時代と段々生活の程度は進んで來た。平安時代になつては驕奢に流れたといはれるが、併しそれとても大したことではない。藤原氏など上流社會のものが奢侈に流れたに過ぎない。殊に宮中で驕奢をなさつて下民の怨恨を買はれたといふやうな例は一つもない。皇室は禮儀・道德・風雅等の淵源であつたと共に、儉約の德に於てもやはり模範となられたのである。

鎌倉幕府の政は全く勤儉で押通した。何事も質素・

簡易を旨とするのが幕府施政の方針であつた。それ故鎌倉時代の逸話には儉德の美談が多い。中にも、北條時頼が時の執權でありながら、或夜味噌を戸棚から尋ね出して酒の肴にした事や、其の母の松下禪尼が障子の切張をした事や、時頼の登用したといふ靑砥藤綱の滑川の話などは、よく當時の時代精神を示して居る。唯徒に儉約をするのではない、平素は弊衣粗食に甘んじて、一旦事あらん日の準備に貯蓄をするのが、武家を通じての教訓である。足利時代の武家の家法・家憲ともいふべきものは、いづれも



儉素を條文に立てゝ居る。武士は何時戰場に立つかも知れないから、平素粗食弊衣に甘んずるといふのでなければ、生命を鴻毛に比することは出來ないからである。

足利將軍の驕奢といつても何程の事でもなかつた。金閣寺・銀閣寺を見ても大抵は察せられる。總じて世間の富貴や驕奢に近づくことは、寧ろ下品な所行として擯斥する氣風が此の時代を支配して居た。即ち高尙といひ、風流といひ、風雅といふものは、富貴に遠ざかつた簡易な生活の中に在るとの思想が流

行してゐたのである。近世に至つて流行した俳諧の如きも、淡泊・洒落、欲望に遠ざかるを其の道の眞意とした。故に閑寂・質朴な家に住み、一椀の抹茶に一幅の掛物・投挿の一輪の花の生活の眞味を求める。物の多くを望まず、富の眼を眩するを好まず、貧しく乏しきを以て安んずる。かういふ淡泊な氣象であるから、人を羨まず、世を恨まない。禪家といひ、俳家者流といひ、世捨人に似て實は世間に立交つて其の榮華に心を惑はされないといふ境涯に達した人である。心を世外に置いて高尚にすることを求めた





人で、全く世間を離れて世事に頓着しないのでは無い。厭世を本義とする佛教も、我が國に來ては現世的なる國民性に同化せられて、其の簡素を尚び、世事に思ひきりよく、富貴を超越した點の、武士の決斷及び質素に影響したことが少なくないのである。

余は歐洲に行く時、往には獨逸の汽船に乘り、還には我が郵船會社の船に乘つた。航海の熱さに、獨逸人の水夫はビールやラムネを盛に飲むが、日本の水夫は唯水を飲んで働いて居つた。此の簡易に甘んじて働けばこそ、西洋の船とも競爭が出來るのだと其

の時感じた。滋養物を食ひ、衞生の事を考へるはよいが、贅澤はするに及ばん。日露戰爭でも、露西亞の兵隊は茶を飲まなければ戰爭は出來ない。將校などは三鞭酒が無ければならんといふ。英杜戰爭の時、英軍の陣營は獵場にでも行つたやうに贅澤な有樣であつたといふ。日本人はそこへ行くと眞劍である。例の梅干と握飯で我慢する。軍隊の方では成るべく給養を好くするやうに務めたゞらうが、兵士の方では別に贅澤は言はない。これは古來からの勤儉の風が遺つて居るのである。此の祖先からの風はいつまでも保存したいものである。併し食ふ物も食はずに儉約するのは、もとより眞の儉約ではない。儉と吝とは似て非なるものである。積極的に働く爲には、體力を養ふだけの事は是非しなければならぬ。唯分を守るといふ心得で、成るべく新しい贅澤に遠ざかることが肝要である。（日本人）

英杜戰爭　英國と南亞弗利加洲のトランスバールとの戰。一八九九年戰端を開き、一九〇二年英軍の勝利を以て終る。





## 二四　境遇

境遇カ、我境遇ヲ作ル。
用アル鍵ハ常ニ光ル。

二兎ヲ追フ者ハ一兎ヲモ得ズ。

數多ノ朋友ヲ有スル者ハ一ノ朋友ヲ有セザル者ナリ。

自ラ高クスル者ハ卑クセラレ、自ラ卑クスル者ハ高クセラル。

## 二五　岩倉右府その一

井上毅

井上毅　熊本の人。文部大臣。子爵。（一八四一―一八九五）

故右府公　右大臣岩倉具視。（一八二五―一八八三）

月日の小車は旋り旋りて流るゝ水よりも早く、故右府公の世を去り給ひしより、今ははや十年餘りぞ過ぎぬる。

大詔のまに〳〵我が國を富士がねの安きに置かでやはと思ひ入り給へる公の一筋の誠心は天地の間に滿ち渡りて、窮みなき後の世まで語り繼ぎ聞き繼ぐべければ、今更に言ふまでもなきことながら、公の逸事の一二を思ひ出づるまゝに書き記して、世の鑑ともし、史人の料ともなさん。

維新の初に神武の古に復るといへる大義を定められしはこの公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の説に、「建武中興の振はざりしは、當時の搢紳にその人なかりしによれり。源親房卿は學識ありて

野々口隆正　石見の人。國學者。（一七五二―一八三二）

時の帝の御覺もめでたかりしかど、その人の所見は延喜・天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ公家・武家の間に隙を生ぜしなれ。」といへり。

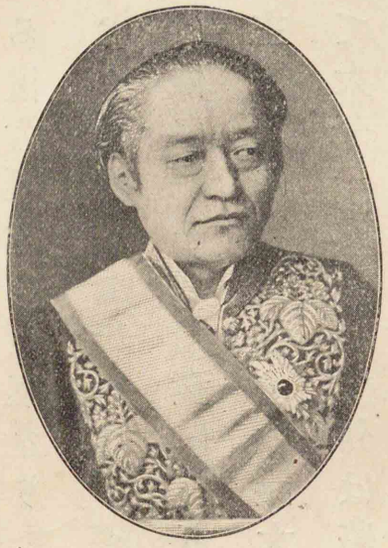
故右府公は搢紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど、夙に大勢を達觀して王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐるために神武の古に復るといへる一大義を唱へ給へるは、これぞ明治の朝廷に人ありと申すべき。この一大義は百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根錯節をば總て



大政返上
慶應三年十月十四日。

岩倉村蟄居
文久二年九月公籠居落飾の命を蒙り采地なる山城國愛宕郡岩倉村に蟄居せらる。

破竹の勢を以て破りたり。世の人は、明治の中興は五百年來の武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心ある人は、溯りて天平以來の宿弊の更に破り難きを破られたることを知るならん。


岩倉具視（寫眞）

徳川氏の大政を返上せし際には、公は譴を蒙りて久しき間岩倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄に召によりて夜中參内し給ひけり。このをり、公は一の大囊を携へて

宮門に入り給ひしが、嚢中の文書は皆公の蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。

玉松操　京都の人。勤王家。（一八〇一―一八三三）

この時大勢なほ定まらずして物論紛々たりしに、公は俄に躬を以て責に當り、從容應答せしかば、雄藩の主も爲に容を改め、朝議大いに決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、内は攝關・議奏・傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の内に定め、後世動かすべからざる基礎を建てられたるは實に公の輔翼の力なり。就中復古の第三日に、禁闕に達文を掲げら

大令　慶應三年十二月王政復古の大令下る。

れて女房の請謁を納るゝことを痛く禁止せられたるは、これぞ數年の宿弊を除き、將來のために一大美事を遺されたるなると公の晩年に親しく物語し給ひき。

玉松操は一の偉丈夫なりき。平生聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を讀むを樂みとなし、夙に神武復古の說を抱きぬ。偶〻公に知られて蟄居の一室を貸し與へられ、起居を俱にして畫策する所あり。公は玉松の功を推して「己の初年の事業は皆彼の力なり」とまでのたまへり。薨去の前年に、一夕ことさらに余

を召して玉松の履歴を物語し給ひ、「その人の功績を空しくなせそ。書き記して後の世の語り繼ぎの料とせよ。」と懇懃に仰せられけり。此の夜、余は他の二人を誘ひて是に侍りしが、その中の一人は漏れなく公の物語を筆に留めたり。己の功を推して人に讓り給ふことといとめでたし。

その後、公の朝廷に勸めまゐらせて、斷然と開國の國是を執らるゝに及びて、「玉松は姦雄に誤られたり。」との一語を言ひ放ちて公の許を辭し、召されても應へだにせず、一室に屏風をたて籠め、その中にて讀書に日を送りけるが、功を論じ賞を頒つ日に逢はずして世を去りぬるぞ歎かはしきと公ののたまひし。

公は蟄居していましながら、その家の裏の隱戸より人知れず大久保・木戸・小松・廣澤等の諸名士を引きて內外の大勢を談論せられ、此の時已に鎖國の非なることを悟らせられつるに、玉松は露ほどもこの事を知らざりけり。彼が口惜しく思ひつるも理なりき。

諸名士　大久保利通。木戸孝允。小松清廉。廣澤眞臣。

## 二六　岩倉右府その二

井上　毅

維新後の公が翼賛の功は明治の大御史と倶に後の

世に傳ふべきなれば、こゝに書きつゞくる要なけれど、公は己の勞を露ほども誇りがほに人に語り給ふことなかりしほどに、史人もえ知らぬことぞ多かめる。世の人は明治二十年と二十二年との條約改正中止の件をば、何某の盡力にてとなりし、かくなりしなど、事々しく言ひはやせど、この事のおこりは十五年にて、公はあかず思召すことありて一方ならず心を盡し給ひ、そのをり一たび中止となれり。されども公は深く祕め給ひて、文書一箱ほどもあるを家に藏めて出さゞりしかば、内々の人ならではえ知る者なかりき。此等は後の人の鑑にこそ。

剛膽は政事家の第一要德なりとぞ聞ゆる。公は長袖の人とも覺えぬばかりに剛毅の德を備へおはしけり。征韓の議、今にも蕭牆の内に變亂を見んとする時に、陸軍將校の中にて武勇の聞えある一人は公の邸に參り、客室に謁見し、一應二應議論の末、怒れる眼血をそゝぎ、毛髮倒に竪ち、脇差を左の手にて鞘も撓むばかりに握りつめ、「貴殿若し意見を枉げ給はずば、御身のために惡しかりなん」と言ひ放ちつゝ膝との間一尺ばかりにまでつめかけたり。此の時、

蕭牆と憂
ゆきり地に憂ひそう

公の家の侍ども次の間に控へ居て障子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりしに、公は少しも動ずる色なく、自若としてその座を守り給ひきとぞ内の人の物語りし。

公のかしこきあたりの御覺え殊にめでたかりしは世の人の知る所なるが、「大君の御爲とならば、我をおきて人はあらじ」と思ひ給へる隱さはぬ明き心の深かりしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか、雲の上の事は筆に載するも畏ければ洩しぬ。

公は大久保故内務卿と心交特に深くおはしき。岩倉村蟄居の折より、大久保卿は密々の往復しきりなりしが、「公の身の上心もとなし」とて、夜なく年少き侍を遣はして守衛せさせつることありしを、公は知り給はざりき。西南の亂平ぎし後、兩公の間に契り給ふ事ありしが、日ならざるに大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に「世の人大久保の志を知りたらんには、いかばかりか哀しみ思ふらん。維新のはじめ十年間は創業撥亂の時なりき。これより後十年こそは内治を整理し民利を進むる時なれとて、將來のために大いに計畫する所ありしに、料らずも

かたみの言葉とはなりぬ」とのたまへり。

公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、又厚く國體の基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて宮内省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺訓の貴きことを世に知らせん爲の計らひとぞ聞えし。

公は勤儉の二字を大政の本として輔弼に心を盡し給ひき。又家を治むるにも儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、「岩倉村の蟄居の時をな忘れそ」とて常に公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を作り、「後の世まで守り文にせよ」とて子孫に遺し



給ひしが、その附錄一篇は專ら奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の床にましく〳〵つゝ、親しく旨を授けて侍ふ人に筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が案文に調印せしは七月十五日にして、薨去の前五日なりけり。今はの際に遺言ありて「己の墓石は父君の墓石の寸法に準へよ」とありきとなん。

公は日に夜に公の事にのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせ給はざりき。朝四時前には目を覺し、「侍やある」と聲かけさせ給ひ、「今日は何某をば何時に召せ。次に、何某をば何時に呼べ。又明日は何某に、何

時に來れ』何某に『夕何時に參れ』と記して申し遣はせ」。など仰せられき。多くの公達は父君の代筆として、文かくことに忙しかりきとなん。

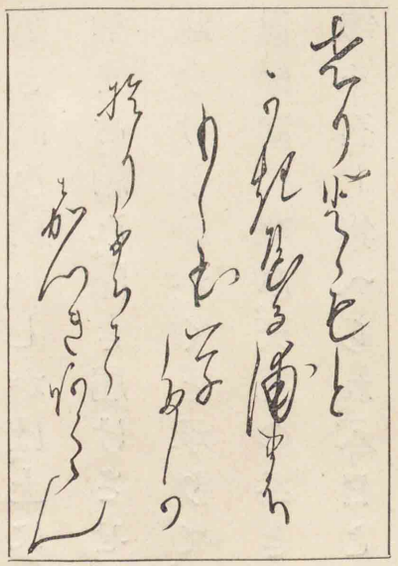
公の病に侵され給ひつるは明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年の頃より何となくあらざらん後の世の心づくしの節々を知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同年の冬或人のもとに贈り給へる書の末に、

きりぎしもとうねやる浦は藻鹽草、
たがれりあちてうづきいのぐらん。





とぞありし。先だつも後るゝも世の習とはいひながら、御國のために行末を思ひやられし公の心こそいとあはれなれ。



岩倉具視筆蹟（井上子爵家藏）

公の平生の仰に、「大臣たるものはその進退によりて節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みなる。われこそ躬を以て人臣の標準は示さめ」とのたまひしが、病重らせ

給ひし後、辭表を捧げん事を思ひ立ち給ひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしも聽き入れず、是非にとて歎き請ひ給ひしかば、上には忝くも誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞き屆けさせ、厚き惠の御敕をさへ下し賜ひけり。　かくと承りて、公はさしもに重き衾を押退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、急ぎ家の子等を召し集へられ、「今日こそは病の輕きを覺えたれ。それ盃まゐれ」とて酒を賜ひけり。　人々歡の色なしたりけるが、さてその翌日に事重らせ給ひぬるぞかひなき。　今はの際まで、夢幻の間にも、公の事のみ心に懸けさせ給ひ、なからん後の事までも人もて雲の上に聞え上げまゐらせしこともありきとなん。

余は本末の序もなく思ひ出づるまゝに書き續けぬ。あはれこの文讀まん人々よ、なき人のかきやりつる藻鹽草をいやつぎ〳〵にかづきあぐべき丈夫の伴となりて、公の地下の靈を百載の後にまで慰めよかし。（梧陰存稿）

## 二七　全氣全念

幸田露伴

太閤が微賤であつた時、信長に仕へて賤役を執つた

のは人の知つて居る事であるが、其の太閤が如何に卑賤の事務を取行つたかといふ事は考察せぬ人が多い。どんなつまらぬ事でも、太閤は全氣全念で之を取行つたに相違ない。で其の點を信長が見て取つて、段々に採用したに相違ない。我々が夜具を丸めて疊む樣なやり口をしたならば、信長は決して秀吉を拔擢しなかつたらうと思はれる。蓋し、秀吉と共に賤役を執つて居た多くの平凡者流は、即ち今日我々が日々夜々に行つて居るやうな、所謂好い加減に遣つておくやり方をして居たに違ひない。





それらの人は、何事も一々徹底する樣にといふ心掛も持たずに、即ち四十五十の齡になつても箒の使ひ樣一つ卒業せずに居るやうな日の送方をして居た爲に、一生其の卑賤の地位を通り越して仕舞ふ事も出來ずに終つたものであらうと想像しても、餘り甚だしい間違は無さゝうである。

然れば瑣事をするにも、瑣事だと思つて輕んずるのは我が心を尊ばぬ所以である。つまらないものは歪み曲つて映つても構はないといふのは、鏡に對して懷くべき正當の考ではあるまいと思ふ。つまら

ないものでも、明鏡ならば善く映るのである。孔子さまは何を爲さつても能く御出來だつたといふ事實がある。太宰が、「夫子は聖者か、何ぞ其の多能なるや。」と云つたのは、全く孔子が何を爲すにも之を能くするところを認めて感じて言つたのか、或はひそかに輕蔑して言つたか知らぬが、孔子がそれを聞いて、「吾少きとき賤しかりき。故に鄙事に多能なり。君子は多ならんや、多ならざるなり。」と謙遜して言はれて居るが、鄙事即ちつまらん事を能くせられた事に徵して見て、孔子の如き聖人が、何事にも全氣全念全力を以てうちむかはれたことも明かに察せらるゝではないか。

つまらんことなどはどうでもよいと、つまらぬ事も出來ない癖に威張つて居るのは凡愚の常で、つまらぬ事まで能く出來て、而して謙遜して居らるゝは聖賢の態である。翻つて思ふに、我々の分際でさへ、つまらぬことなら少し全氣全念で打對へば大抵出來るのであるから、まして聖賢の英資を以て之に臨むとすれば、譯も造作もなく出來る筈なのである。そしてそのつまらぬ事にさへ全氣全念を以て打對は

る、健全純善の氣は、やがて赫々たる功業德澤を成さる、所以なのである。一方に凡愚の輩がつまらぬ事さへ能く出來ぬのは、即ち何も出來ずに終る所以なのである。

全氣全念を以て事に從ふのは儒教に所謂「敬」といふのがそれで、全氣全念を保たんとするのが、道家の所謂「錬氣」の第一着なのである。であるから、譯も造作も無い日常の瑣事がちやんと出來る迄には少し修行がいると云ふのである。併し一度手に入れば、忘れようとしても忘れられぬことは、丁度一度水に浮





ぶ事を覺えると、水にさへ入れば自ら浮く樣なもので、掃除なら掃除に一度徹底して仕舞ふ處まで行けば、もう煩はしい事もなく、自ら善く出來るのであるから、案外面倒な事では無いのである。朝起きるから夜半に寢るまで、すべて踏み外しなく、全氣で仕事が出來れば、それこそ實に大した事であるが、さうは行かぬまでも、机の前に坐つたり、むづかしい問題を考へる時ばかりを修行と思はずに、一擧手一投足、茶を一つ飲む所にも修行場は有ると思つて見ると、嘘でも何でもない、何人と雖も六七日乃至八九日にし

て必ず一進境を見得るであらう。いや少なくとも瑣事の三つや四つは徹底することが出來よう。手近い例を擧げれば、黑闇に脫いだ吾が下駄は黑闇で穿けるのが當然だが、全氣で脫いでなかつた下駄ならば、急に智炬を燃しても巧く穿けぬのである。併し下駄を脫ぐことに徹底すれば、何時でも黑闇で穿ける、智炬を燃すには及ばないのである。坐り方に徹底すれば、衣服の褄や襟先を手で揃へずとも、ちやんと坐れるのである。机上の整理に徹底すれば、文房具の置合せの位置などは何樣變化してもおのづから整頓するのである。室内の清楚であり得るかあり得ぬかも、僅々の日數で徹底し得るのである。藝術となれば碁や將棊の樣な末技でも、深奥測るべからざるものであるから、二週間や三週間では玄關丈も覗へぬけれども、日常の瑣事などは、全氣でやりさへすれば誰しも容易に徹底し得らるゝやうになる。かくして、刹那々々秒々分々時々刻々に、當面の事を全氣で遣りつけて行く習慣をつけると、何時の間にか散る氣などいふ習は脫却してしまふやうになるものである。（努力論）

**徳川齊昭**　水戸藩主。（一二四〇―一二五二）この書は餘四麿附の女中頭へ遣はせるもの。

**綠の間**　齊昭の生母お家の方。

**餘四麿**　齊昭の第十四子昭訓。

**神勢館**　嘉永五年齊昭藩士の爲に水戸城外の細谷村に設けたる砲術練習場。

## 二八　公子の躾方を申遣はす　徳川齊昭

餘寒の處、その地子供等、綠の間にも障なきは一段の事に候。去る二十七日、餘四麿事、神勢館へ行き候由、是よりは步行又は乘馬にて度々行き候が宜しく候。朝も未明より起き、水にて顏を洗ひ、薄着にて庭などに出で、子供相應いたづら致候が宜しく候。風を引き申すべしなど申して、用心致させ候は以ての外に候。とかく武士の子は手强く、手あらに成長致し申さず候ては、





追々成長の上、公家や町人、出家の樣に成り行き、天下の御爲を致候樣相成らざるゆゑ、何分にも手强く體を幼年より鍛へて育て候樣に致したく候。さて、文武共に出精致させ候が宜しく候。文武を勵まし、それにて死に候ほどの子は惜しからず候へば、死に候ても苦しからず候。他家へ養子に遣はし候ても、柔弱にて、文武これなき者にては、水戸家の外聞宜しからず。死に候は、誰にても一度は死に候者故、外聞宜しからざる子供が成長致候位に候はゞ、死に候方はるかに

伊勢　餘四麿附の女中の名。

好文亭　天保十年齊昭水戸の西郊に偕樂園を開き中央に好文亭を建つ。

勝り候故、表の附の者、並に伊勢等へも申聞候て、前文の通り、手あらく仕立候て、文武を勵まし申すべく候。奥にても、附の者に申聞候て、讀書のさらひ等をよく〳〵致させ申すべく候。書は、文武稽古の間は、前文に申すべく候。

徳川齊昭（東京帝室博物館藏）

如く神勢館又は好文亭等へ歩行致候が宜し、又





相手などと竹刀打致候が宜し。子供の大人の如く致居候は身のこなれ悪しく宜しからず候。如才はこれあるまじく候へども、序に任せ申遣はし候。牛乳は人乳をやめ候程の子供は誰が用ひ候ても宜し、毎朝取立の乳を飲ませ申すべく候。一人にて五匁か一

徳川齊昭筆蹟（水戸弘道館記碑）

松延・本間
水戸藩醫松延眞雄。同本間讓。

一橋
齊昭の第七子慶喜、弘化四年出でて一橋家をつぐ。

合も飲み候はゞ足り申すべく候。これは松延・本間等へ申し談じ候が宜し。一橋よりは今以て日々取りに來り、一二合許宛遣はし申候。何よりも牛乳に越し候藥はこれなしと存候也。

尙々餘四麿始め、毎朝の水は只今にても浴び候事と存候。若し浴び申さず候はゞ、浴びせ申すべく候。さるかはり、湯は遣はせ申すまじく候。

中學國文教科書 卷四終



文部省檢定濟
大正四年一月九日　中學校國語科教科書

明治三十九年十月十五日印刷
明治三十九年十月十八日發行
明治四十年一月十一日訂正再版發行
明治四十三年十二月五日修正四版發行
明治四十四年一月廿八日修正五版發行
明治四十四年十二月十五日修正五版發行
大正四年一月二日修正十版印刷
大正四年一月五日修正十版發行
大正元年十二月三十日修正六版發行
大正元年十二月二十日修正八版印刷
大正元年十二月廿三日修正八版發行
大正三年十月廿五日修正九版印刷
大正三年十月廿八日修正九版發行
明治四十五年二月廿六日修正七版發行

中學國文教科書全拾册
定價 一卷ニ・三 各金三拾二錢 一卷四・五・六 各金二拾八錢

著者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平

編輯兼發行者　東京市神田區裏神保町六番地　上原才一郎

發行所　東京市神田區裏神保町六番地　光風館書店（電話本局二千三十九番 振替口座東京三二七番）

印刷所　大阪市東區淡路町四丁目十二番地　大阪寶文館

關西專賣所

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直ちに御送附可致候

著作權所有

卷四

東京秀英舍第一工場印刷